

わたしが倒してあげるんだから!

大熊狸喜
挿絵 / saxasa



立ち読み版

ラッキー・ミリオン



Lucky Million

「宇宙平和維持機構」から派遣されてきた特殊捜査官(?)にして謎の生命体。

Ryasuko Tatsumaki

正義の味方見習い。能力が開花しないことに悩む度の過ぎたスケベ少年。



竜巻良介

Mai Kusanagi

良介の幼馴染み。右手薬指にはめた指輪で「スカーレットソード」に変身する。



草薙舞

スカーレットソード

CHARACTERS



茄香野佳奈



アタックジャスティ

Kena Nakano

正義の味方を目指す、どこか天然な雰囲気を持つ少女。額に宝玉を浮かべ、「アタックジャスティ」に変身する。



Nanaka Shinjaji

良介達に通う「正義の味方総合教育学園」の英語教師。

鉄流紗夜華



真成寺リツ子



シャグキグリーン

Sayaka Tatsunagare

少しひねた感じの不良少女。イヤリングを使って「シャグキグリーン」へと変身する。

しかもその姿を、良介に見られていたのだ。少女の全身に羞恥が走り、耳まで真っ赤に染め上げられる。

「きやあああああああああああつ——な、何で何でつ——り、良ちゃん見ないでっ、あっち向いてっ！」

——ごんっ！

「どわっっ！」

ヒザの上から、怪我した良介は叩かれてどけられる。素手で振るわれた拳は必殺技よりも、尋常じゃないくらい痛かった。

混乱する少女や激痛にあえぐ少年をヨソに、冷静な特殊調査官。

「今の打撃が最も大きなダメージ」

屈んで全身を隠す舞だけれど、胸や秘処はカバー出来ても、ツルツルのお尻が隠せていない。理由も不明な全裸のまま、少女は再び変身する事を思いついた。

「そ、そうだわ、変身変身んっ！」

——ッピカーっ！

慌てて再変身するものの、しかしスーツは修復されず、先ほどの戦闘で破れたまま。乳房もお尻も剥き出しな、全裸よりも恥ずかしい半裸ヒロインの姿だった。

「ななな何でっ、ちよつと良ちゃん、良ちゃんの仕業でしょっ！」

「いややや、オレ知らないよ、マジでマジで！」

慌てて否定しながらも、幼なじみの恥ずかしヒロイン姿にニヤニヤしてしまう、スケベなズタボロ少年。

変身を解いた舞が何で全裸なのか。何で再変身してもスーツが戻らないのか。良介にだって本当に解らない。

いわれなき罪を着せられて慌てる少年の横から、無機質妖精が解説をくれた。

「良介が吸い取ったのは、どうやら悪意だけではないらしい。闘った相手、この場合は舞の、スーパーヒロインパワーもごく少量だけ、吸収していた様子」

「だ、だから変身を解いたら裸だったり、スーツが破れたままだったりって事っ!？」

「舞から吸い取っていたパワーは、きつとスーツや変身前の衣服を構成する部分。それは悪意ではないから、多分に良介自身の意識が作用していると思われる」

つまりスケベ良介が「スーパーヒロインの衣装破けばエッチだな」とか「変身解除して裸だったらエッチだな」とか思っていたから、怪人化した時にそのような効果が発揮されたのだ。

いわれなき罪ではなかった。妖精の解説に、ボロボロ良介も納得。

「なるほどな」

「なるほどなくじゃないわよっ！」

若い地球人男女の羞恥ケンカには一ミクロンも興味がないらしい、宇宙人調査官。

「スーツのパワーは悪意ではないから、舞の攻撃で消滅はしていないはず。性的接触をし
て良介の体液を胎内に受ければ、パワーは戻ってくると推測される」

「たっ、体液っ、胎内っ——」

セックスだけでなく、更に中出しされるとまで、無機質に言っている。

「り、良ちゃん……！」

少女の脳裏には良介とのセックスだけでなく、膣内射精される自分までもがリアルに想像される。しかも想像の中の少年は、三割増しくらい格好いい。

そして良介の脳裏にも同じく、幼なじみとセックスして中出しという、エロマンガみた
いな情景が浮かんだ。

（舞とセックス……中出し……！）

『ああん、良ちゃんっ……そんなにしちゃ、恥ずかしいよう……！』

自分の下で快感に羞恥しながらあえぐ舞の、なんと可愛らしい事か。全部想像だけど。
エッチな妄想にニヤニヤしていたら、また幼なじみの打撃がゴンつと与えられた。

「なっ、なに想像してるのよ、スケベ良ちゃん！」

「あててっ！」

「更にダメージが追加。これ以上のダメージは控えたほうがいい。それに舞にとつても、

接触はしたほうがいい」

良介とのセックスは、舞にとつても良い結果になると、妖精は言う。

「今の再変身でも解るとおり、パワーを戻さないと今後の変身もその姿のまま。更に舞が性的接触をする事で、良介のダメージは完全に回復出来る」

「た、確かにスーツがこのままじゃ、困るけど……」

「オレはいいけどな。舞の半裸が見られるワケだし。うひひ」

ポロポロなのに、少年の目はエロ全開だ。幼なじみも軽く呆れる。

「それに舞がダメージを回復させないと、良介の身体は自力で回復を始めてしまう。自分の生命力を五十年分くらい使って——」

「ごじゅっ——オレ、じーさんになっちゃうじゃんかっ！」

困惑するズタボロな少年を、舞は頬を染めながらジィつと見る。数秒の間があつて、幼なじみはなんだかわざと大きく息を吐いて、決意した。

「しよ、しようがないわねっ……良ちゃんを倒しちゃったのはわたしだしっ、良ちゃんが怪我したままだとわたしの責任になっちゃうし……かか、勘違いしないでよっ、し、仕方なく、仕方なくなんだからねっっ！」

まるで反論や質問を許さない、みたいな囁み囁み口調の半裸ヒロイン。自分で言ったのに恥ずかしいのか、真っ赤になつた媚顔も逸らしっぱなしだ。



スカールレットが半裸姿で公園から出られないから、二人は大きな茂みの中へ。なんだかんだで良介も身体が辛いので、仰向けになった少年の上に、幼なじみが跨またがる格好。

腰に乗せられる幼なじみのお尻が、柔らかくて温かくて、重みもエッチだ。

(何となくこんな体勢になったけど……やっぱ緊張するな……)

初めてのセックスだし、もしヘタな事したらヤだな、とか、年頃の男子らしいプライドも首をもたげる。

それに何とというか、いつも軽口を叩いたりケンカしたりしている幼なじみが、女としての部分を晒してくれようとしている。

「こ、こんな場所なんって……誰かに見られたら……わたし、は、初めてなのに……」

女の身体が目の前にあるのは、妙にリアルだと感じられる。ドキドキさせられるこの柔らかそうな半裸の女体は、確かに舞の肢体なのだ。

「ま、まあ大丈夫だよ。だいいち、外を歩くワケにもいかないだろう」

「そっ——そそれは、そうだけど……」

ドモった。そして視線を逸らして真っ赤になった。

(……ん、実は舞のほうが、かなり緊張しているみたいだ……)

そう解ると、不思議とちよつと余裕も出てくる。なにより怯える女の子を前にして、護つてあげたいという男子特有の庇護本能みたいなモノも、強くなってきた。

女子の羞恥心が男子よりも強い事に、ちょっと感謝する良介。どうしても、という舞の希望で、ヌイグルミ使者には離れて見ないで貰っている。

少しだけど余裕の中で、改めて騎乗位姿勢の幼なじみを見上げると、思った。

「こんなアングルで舞を見るの、初めてだな」

「こ、こんなの、恥ずかしいわよ……！」

言われた少女は戸惑いながら、両掌で乳房を隠している。破れたスーツからは健康的な肌色が見えて、特におへソは結構エッチだ。

開脚して座っているから、ミニのスカートからショーツが覗けている。柔らかそうな秘処部分に張り付く下着は、薄くムッチリと割れ目を浮かせていた。

幼なじみの羞恥姿と、腰に掛かる体重と体温。衣装が隔っている肌感触も手伝って、良介の股間は急速に血を集めてゆく。

(舞の身体、結構色っぽいんだな)

そんな事も思いつながら、両掌が食い込む白い乳房に目を引かれて、良介は幼なじみの掌に触れた。

「見せてよ、舞」

「えっ……あ、やだ……！」

言葉とは違って、殆ど抵抗しない舞。覆いから解放された双つの乳房は、少年の目の前

でフルつと揺れる。

白い肌は丸くて張りがあって、先端の媚突は明るい桃色。ツンと上を向いていて、男子の興味を強く引いた。

「そ、そんなに見ないでっ——ひゃんっ」

視線を恥ずかしがる少女のバストに下から触れると、肢体はピクつと震える。

掌で持ち上げた柔らか乳房は、スベスベしていて温かくて重くて、触れている良介も何だか、不思議な幸せを感じられた。

「舞の胸って、思っていたよりも大きいんだな」

「そ、そんな事……エッチ良ちゃん……」

指の力を、柔らかい弾力で受け止める双乳。優しく揉み上げていると、熱をはらんで次第に汗ばみ、吸い付くような肌触りになる。

「んん……良ちゃん、触り方、優しい……」

恥ずかしさとは違う熱で、少女の肌が紅葉色もみじに染まる。良介の掌から逃れるように、でももつと愛撫を求めるように、肢体は滑らかにくねってゆく。

霧状の汗を纏った肌は、女性らしい、官能的な柔らかさも増してゆくようだ。

(舞のこんな姿、初めて見る……)

幼なじみの、女を垣間見るような、一瞬一瞬。子供の頃、一緒にお風呂に入っていた時

とは根本的に違つと、素直に解つた。

乳房から脇のラインを通して、広い少女腰へと掌を滑らせる。指がなざると肌はピクつと反応して、更に舞の肌が熱くなる。

もう豊かなバストを隠さない、半裸の少女。少年の視線に羞恥しながら、潤む瞳を逸らす事もしない。

野外という環境は恥ずかしい。でもそんな非日常という状況に、身体が必要以上の興奮で熱くさせられている様子。

そんななかでも自分に全てを委ねている少女の姿は、無条件に愛おしくて綺麗だと、良介は思った。同じ女の子なのに、幼い日とは全然、印象が違つて見える。

「女の子って不思議だよな。子供の頃から知つてはるはずなのに、こんなに綺麗だったんだな、とか思つちゃうよ」

「つ——つも、もう……！」

少年の素直な言葉に、更に全身を真っ赤に染めて、言葉をなくす幼なじみ。

困惑したような嬉しいような複雑な表情は、良ちゃんのために磨いてたんだからね、という無言の告白にも感じられた。

開脚した腿から内股へと触れると、縦長のおへそもキュつと力む。

「ひゃんっ——良ちゃん、そんなトコ……！」

これからの展開を知っている舞が、良介のスケベ能力やミリオンの事を説明して、ニコ笑顔で良介の袖を引っ張る。

そんな裸少女の話聞いて初めて、紗夜華は、自分が全裸だと知った。

「あれ、そう言えば、アンタ裸……うわぁっ——っアッアタシもっ……!!」

真っ赤になった不良少女は、膝枕のまま両掌で胸を隠して、やつぱり再変身。そしてやはり、乳房やお尻が露出したままのダメージ衣装に変身していた。

デジャヴみたいな光景に、佳奈も舞も恥ずかしい。

「と、取りあえず良ちゃんの回復は、わたしがしよつか……?」

と言いかけたら、なんと小柄なメンバーが乱入。

「いえいえ舞さん、今回は私がご迷惑をおかけしたトコロもありますし……」

何やら取り合いをしているようにも見える。そんな様子が「？」の半裸グリーンに妖精が説明をすると、舞は「また余計なコトを」的な視線をミリオンに向けた。

回復方法やスーツの事などを理解した銃撃少女が、真面目な美顔で決意する。

「コイツの回復は、アタシがするよ」

「うう……」

「です……」

どのみち、それが一番効率良く良介を回復させる手段だし、今後のスーツの事もある。

今回は舞だけでなく、なんだか佳奈も物欲しそうな表情だった。

舞と佳奈とミリオンが屋上から一時退散すると、紗夜華は恥ずかしそうに頬を染めて、乳房を隠して崩し正座。

そんなポーズは、ボディスーツのヒロインなのに何だか和風に感じられて、良介はドキさせられた。

羞恥で視線を泳がせながら、ボソと告白する少女。

「ア、アタシは、その…は初めてなんだ。だから…きつとへただつ……すまない……」
消え入りそうな声。そんな不良少女が、とても可愛い。

良介は、ちよつとしたイタズラ心を以て、紗夜華の不安を取り除こうと考えた。前髪を撫でて、額にキス。

「大丈夫だよ……ちゅ」

良介的には「ななな何するんだっ!」とか照れ隠しすると思っていたら、少女は更に美顔を染めた。

「あ……そんな事……す、する、のか……?」

額へのキスだけで、恥ずかしすぎて震えている。ずっと復讐に邁進まいしんしていた一本気な紗夜華だから、全てが未経験。不良少女は身も心も、完全に無垢な少女のままだった。

(うおお、不良だった紗夜華……全部オレが初めてっ!)

そう解ると、若い性本能は強く刺激される。股間の肉も、グンつと一瞬で臨戦態勢。

「とにかく、オレの言う通りにしてくれれば大丈夫だから」

「わ、解った……り、良介の言う事なら、信じる……！」

少年の事を、初めて名前で呼んだ紗夜華。

真剣に見つめる少女を、良介は仰向けに寝かせる。

半裸の武装少女は剥き出しの巨乳をそれぞれ掌で隠しているけど、その柔乳は重力に逆らって、魅惑的な膨らみを維持していた。

「紗夜華の胸、ちゃんと見せて」

「っ——っり、良介が、そう言うなら……！」

僅かに逡巡するものの、羞恥に目を閉じ、震える掌を素直に外す。

大きな白い双乳は、つきたてのお餅みたいに白くて柔らかか。先端の媚突も小さくて桃色で、外気と少年の視線に触れると、ツンと硬化を見せた。

「大きくて綺麗だな」

言いながら、双つの巨乳を外から寄せて持ち上げる。温かい乳房は掌にシットリと吸い付いて、タツプリの重みは女体ならではの官能的な感触だ。

「あ、良介……んん……んは……なんだか、アタシの、胸……んう……！」

初めて触れられる男子の掌に、そして自らの乳房が得る性感に、少女の恐れと、それ以

上の期待感があった。

白い柔脂肪を優しく優しく揉み続ける。頬を染める紅葉色は羞恥だけでなく、不安と目覚め始めた官能も。ちよつと泣きそうにも見えた。

「んく……はああ……良介……アタシの身体……なんか……」

乳房や肌が熱を持って、薄く汗ばみ上気する。吐息に湿り気が含まれると、凜々しいツリ目も潤んで揺れた。

揉み遊ぶ少年の掌に、細い指が弱々しく縋り付く。先端の桃色乳首を指で挟んで転がすと、紗夜華は初めての甘電に背筋を反らした。

「っんあんっ——っはああ……な、何だいま、ビクって……良介、アタシ……んく……」

どうにかしてと、濡れるツリ目が訴えている。未知の性感を教えられて、広く発達した少女腰も、拙く小さくくねっていた。

触れる女体も温かく湿っていて、自分に縋って求めている。

そんな事実が鼓動が速まり、少年の欲求は更に正直になった。

「脚、開いて」

「あしっ——こ、こう、か……？」

良介の言葉に驚きながらも、紗夜華はユルユルと腿を開く。ムッチムチの内股は恥ずかしさで上気していて、少年の視線にプルッと震えた。

どこまで開脚すればいいのか解らなかつたからだろう。羞恥に耐えて、限界まで美脚を開いた不良少女。

「こ、こんな…カエル、みたいに……」

そんな表現が可愛くて、ちよつと笑つてしまった。

「笑つたな……アタシ、ヘンなのか……？」

「いや、紗夜華つて可愛いな、つて思つて」

「か、可愛い……アタシなんか……」

「すごく可愛いよ、身体も綺麗だし」

耳まで真っ赤になつた紗夜華は、目を閉じたまま開脚羞恥に耐える。肌にピツタリだつた全身レオタードは、更に汗で張り付いていて、少女の割れ目を浮かせて魅せていた。

柔らかい食い込みに沿つて指撫ですると、開脚したヒザから先が、ヒクんと跳ねる。

「んくんっ——っそ、そんなトコも……うん……りようすけが、望むなら………ひん……っ！」

秘処に触れられる恥ずかしさに耐えて、紗夜華の両掌は少年の肩に添えられている。

夕闇の空に包まれる屋上に、遠くから電車の音が聞こえる。それでも恥ずかしがる少女の耳には、届かないようだ。

先の戦闘でお尻が破れたスーツをそつとずらすと、良介は紗夜華の開脚女性器を露出させる。東の空に星明かりが見え始めても、少年の本能は女性器を見逃さない。

「っ——っりようすけ……そんなに、見るな……あうっ……！」

あまりの羞恥に言葉では抵抗するものの、震える脚は閉じない真面目な不良少女。

紗夜華の処女粘膜は、綺麗で艶々で僅かに濃い桃色で、濡れていた。

スレンダーな体型型だけど、皮下脂肪はムチっと程良い肉付き。肉芽も小さくて薄い朱色で、左右の花弁も揃って綺麗な形だ。

尿口も膣孔も、軟らかい粘膜にプツと開いた感じで可愛くて、朱い後孔までをも見せてくれていた。粘膜全体は薄く蜜を纏い、膣孔と一緒に震える縦長の菊肛も、蜜に濡れてヒクんと収縮。

視線を感じるほど敏感らしく、クリトリスも三つの媚孔も、見つめる度にキュッと恥ずかしげな反応を見せた。

「見るだけで感じるなんて、敏感なんだな」

「バ、ばかっ——っひうっ……！」

秘処の先端にキスをする、強気な文句は裏返って飲み込まれる。

開脚する羞恥少女の膝裏を、腕で押さえて巨乳の横まで持ち上げる。半裸の肢体に覆い被さつてもう一度額にキスをする、良介はガチガチのペニスを膣孔に当てた。

「はんっ……すごく、あつい……！」

一瞬だけ腰が跳ねる。初体験の粘膜はキュむっと収縮をしながら、ペニスに拙く吸い付

いてくる。

「行くよ」

「ん、うん……か、覚悟は、できてる……りようすけの、いいようにして……」

少女は決意を伝えると、弱々しい力で少年の胸に抱き付いた。ゆっくりと腰を進めてゆくと、紗夜華は美顔を胸に押しつけ、怖さを堪える。

キツすぎる行き止まりに到着すると、良介は少女に耳打ちした。

「紗夜華、一、二の三で力を抜いて。そのままオレに任せて」

「わ、解った……い、一、二の、三……っ——っ！」

——っちぶっ！

「っ——っ……いま、中で、弾けた……！」

言葉どおり、良介は紗夜華が脱力したタイミングでペニスを突き込む。紗夜華の処女が、正常位の姿勢で捧げられた。

ゴム管みたいにキツかった膣壁が、小さな刺激でフワリと軟らかく変化。初めての男性器を体験した処女膣孔からは、喪失の鮮血が一筋流れた。

「はああ……りようすけの……アタシのなかで……すごく、いっぱい……」

破瓜の衝撃で、紗夜華の息が苦しうに乱れる。しかしすぐに痛みが引いたらしく、キツく閉じて苦痛を堪えていた臉が、トロンと薄く開かれた。



「りようすけ……んん……なにか、ヘンな感じだ……」

「うん、今なんとかするから」

助けを求めるような眼差しにそう言いながら、少年は腰の抽送を始める。最初はゆつくと前後して、少女の様子を見ながら次第に速く。

——ちぶつちぶちぶちぶ……つぶりゅぶぶ……つぶちゅぶつぶ……つぶりゅぶつぶぶつ。

「んんん……あはあ……もつとへ、ヘンになるよ……あん、はあん……はあ……！」
 少しずつ速度を上げる太くて堅い肉厚に、初めての胎内が慣らされてゆく。そんな「変化させられる」感覚が、女の本能に切なく甘く浸透するのだろう。

ペニスを引かれると吐息が溢れ、奥まで突き込まれると息が詰まる。それでも性抽送の熱と刺激は、少女の肉体に確実な影響を与えていた。

未知の勃起に対しておののくように震えていた膈壁が、拙く弱々しく、全体で締め付け、愛撫を始める。

「んくつ、はああ……りようすけが、アタシをつ……あはうう……アタシが、りようすけにつ、変えられちゃふう……つ！」

熱い粘膜が意志を持ったように抱き付いてきて、襞を増やして勃起を刺激。更に抽送を促すように、熱い蜜がトロトロと溢れてきた。

多数の襞で、勃起の肌が抱かれ刺激される。軟らかくて密着する粘膜は、速い抜き差し

でもペニスを放さず、鈴口の割れ目まで愛撫してくれた。

勃起全体が甘電で痺れて、背筋や腰が熱を溜める。視界の中では、双つの巨乳が大きく楕円を描いて揺れている。

「すごいっ……紗夜華の中、襲々でこすれて、ビリビリする……っ！」

「そふっ——んひゃんっ……それは、いいのっ……!! アタシ、いいっ——っアタシはりよ
うすげが、いいいっ——はひゃああああ……っ！」

素直な告白をくると、そんな自分に羞恥したのか、紗夜華の膣壁は更にキムリユウ
つと締め付けてきた。

肉カリ部分の裏側や、鈴口下部の弱点を襲撫でされる。勃起の中心が痺れるような性感
を受けて、少年の理性が蕩かされてゆく。

（——っうくくっ、もう、出したい……!）

そして腰の肉突きが、頂点を求めて速度を上げた。

——っづゆぶづゆちゅぶっ、るちゅぶぷりゅっづぶづぶぷりゅっ!

全力の腰打ちを受けて、紗夜華のスレンダーな肢体がカクカクと揺れる。子宮口を突き始
めると、いつもの凜々しい言葉がトロんと蕩けた。

「んやっ、んやんやんっ——そんなにつつよくうっ——っアタヒっ、ラメになっちゃふ
よおおおおおううううっ……!」

「さ、召し上がれ」

「……い、いただきます……ばく……んむっ！」

一口食べて、驚愕の味。ご飯は団子状にくっついてるし卵はパサパサ。胡椒も強くて塩も利きすぎ。

悪意を吸収する身体も、決して食べるなど警告していた。

周りを見ると、少女たちも硬直している。コレはもう料理というより、危険物レベルだ。

「舞……味見したか……?」

「したわよ失礼ね、美味しいじゃない」

忘れていたけど、舞は天然の味音痴だった。平気な顔してパクパクと食べている。

流星に言葉が出ない良介。というか、ケンカになりそうな言葉しか思い浮かばない。

無言のまま、最後にノノ子先生のチャーハン。

「うおお……これはすごい……！」

全てのご飯がパラりと炒められていて、更に満遍なく卵でコーティングされている。柔らかな香りだけでなく美しさまで魅せるその料理に、佳奈たちも感動していた。

「これは俗に言う、黄金チャーハンと呼ばれる最高の料理ですっ！ もはや点数なんてつけられませんですっ！」

「なんて綺麗なんだ……しかもこの優しい香り……」

「う……たしかに、美味しそうだわ……」

生徒たちの反応に気を良くしたノノ子先生が、チャーハンを勧めた。

「……いただきます……」

「です」

フワリ……とした食感は、まるで雲みたいに軽やか。口に入れた瞬間、卵の甘い香りがいっぱいに拡がって、それだけで幸せな気分になる。

ご飯はパリりと気持ちよくバラけて、卵の味も均等にまろやか。

「んんん……おおいひいひい……」

思わず全員が、味音痴な舞までもが笑顔になっていた。これはもう完全に、最高級な中華料理だろう。そんなワケで、第四種目はノノ子先生が優勝。

「イツエーイツ、センセイも優勝しちゃったあ。一ポイントげつと〜♥」

この優勝に何の意味があるのか全く不明だけど、女教師が言い出した「第一回 今夜、誰が良介クンのお部屋に泊まるか選手権」は、教師本人の乱入によって全員で優勝、引き分けというダルダルな結果になった。

勝負を混乱させたノノ子先生は、新たな妙案を言い出す。

「引き分けでしたね〜。それじゃ皆さん三人で、良介クンとお泊まりしなさいな♥」

「……ええ〜っ!!」

(三人って……マジでっ!?)

もはや教師とは思えない発言を、ドヤ顔でするノノ子先生。思わぬ展開にドキドキする少年。

アイディアを聞いた紗夜華が、頷いて乗っかる。

「なるほど……では今夜、みんなで良介の部屋に行くのはどうだ？」

「えっ、でもオレの部屋って……そんなに広くないぞ」

そう言うのと、得意満面の司令官が得意満面に解決策をくれた。

「あら、だったらこの部屋に泊まりなさいな。シャワーもあるし仮眠室もあるし、学園にはセンセイが許可を貰ってあげるから。まあ合宿みたいなモノね♥」

「ま、マジですか…!？」

こうして良介たちは、初めて部屋に泊まるコトになった。

順番にシャワーを浴びると、四人は簡易ベッドに腰掛ける。二つのベッドをくつつけた寢床は、四人が乗っても十分な広さだ。

照明を落としたベッドルームは、それだけでセクシーな空間。

腰タオル一枚でベッドの真ん中に座る少年は、バスタオル一枚で四つん這いの少女たちに取り囲まれる。シャワー後の、石けんと湿り気で鼻腔が擦くすくすられると、エッチな気分です。

キドキしてきた。

「こ、こうなっちゃったからっ……ししっ仕方なくなんだからねっ……ちゅ」

真っ赤になつて羞恥する幼なじみが、両頬をとつて、優しく口づけをくれる。

(んん……舞のキス、軟らかくて良い香りだな……)

そのまま仰向けにされる良介は、キスを受けながら、イタズラ心でバスタオルをただけさせる。瞬間、ポニテのキス少女の肌が、ピクッと震えた。

幼なじみ同士の口づけに、少女二人も行動を始める。小柄な佳奈が、高く持ち上がった少年の腰タオルを指で摘んで、ちよつと躊躇つてから思い切つて外す。

「ひやつ……えつと、紗夜華さん……私たちはコッチを……」

「あ、ああ……でも、何だか……こんなに大きかったのか……」

初体験の時には、ジックリ観察する余裕なんてなかったからだろう。ギンッと堅くて太い勃起をあらためて見ると、親友同士の二人はその大きさや形に視線を奪われていた。

見ているだけでドキドキするのか、紗夜華たちの瞳は潤んで、喉が小さく鳴る。

お互いにどんな奉仕をするのか、三人はシャワーの時に決めていたようだ。

紗夜華が左側に位置して、佳奈は右側。そしてバスタオルをはだけた二人は、自らの乳房をムニユリと寄せて、意を決する。

「かっ——んく……佳奈……む、胸で、するのだな」

「はい……それじゃ、一、二の、ん……っ！」

——ぶにゅむりゅ……

天を突く堅ペニスが、左右から柔乳で挟まれた。左側からの巨乳で肉茎の大半が挟まれて、右側からはクリクリの乳首に触れられる。

そして二人は、乳房奉仕を開始した。

「せ……の……んしょんしょ……」

(わ……これはこれで、変わった刺激だな)

軟らかい巨乳にムッチリと挟まれながら、スリスリと上下摩擦。そして右側だけを、乳首でクリクリと、くすぐったく擦り上げられる。

「んちゅ……ぶちゅぶ……」

幼なじみのキスと、少女たちの乳房奉仕。上下同時に愛撫されて、良介の肉体は更に欲求を高めてゆく。

もっと刺激を求めるように、ペニスもピクピクつと蠢動した。

「あ……何かピクつて、してます……」

「良介が、アタシたちに感じているのか……」

そう思うと、どこか満たされる様子の少女たち。数回の愛撫でペニスの欲求を感じ取ったのか、あるいは思っていたよりも動きづらいのか、二人は身体の位置を替えた。



少年の腰に対し、黒髪少女はお腹側からペニスを包み、ショートカットの少女は脚側からの乳首タッチ。プニ弾力のパン生地で挟まれてイチゴの先端で突っつかれるような、ちよつと不思議だけど気持ちいい刺激。

(んぐぐ……二人の奉仕……結構いい……！)

汗を纏い始めた巨乳が、シットリとペニスを包んで密着して愛撫。吸い付くような乳肌、亀頭部の裏側がスリスリされる。

二つの小さなツン乳首で、本体裏側の弱点を、小さく細かく擦られている。親友同士のバッチリなタイミングのおかげで、肉棒と性感帯へのスリ上げスリ下ろしも、完全にシンクロしていた。

「んちゅ、ちゅ……んふ……ちゅぶりゅ……」

軟らかく吸い付くキスも、ヌル濡れる舌が侵入してきて、ヌツチュリと絡み合う。頬に触れる掌も熱を高めて、舞の鼻腔から溢れる吐息にも、艶と湿りが感じられる。

双つの豊乳を優しく揉むと、四つん這い状態で突き出された裸尻がプルつと震えた。

「んひゅ……りようひゃん……ちゅう……」

(んうう……キスもオッパイもパイズリも……すごく、気持ちいい……！)

舌キスをしながら双乳を揉み遊び、更にペニスは乳房奉仕と乳首擦りで性感愛撫をされている。肉体的な刺激だけでなく、三人の少女と肌を合わせているという事実も、男性の

征服欲を十分に満たしてくれていた。

(うう……早くしたい!)

若い男子の肉体はドキドキと興奮が高まってゆき、挿入と射精の欲求で急かされる。全身が性感に熱を上げると、ペニスの先からも透明な汁が先走った。

「きゃんっ……な、何か出てきたです……!」

「透明だな……ん……なにか、ニガい……んふ……」

指先で触れた紗夜華は、ちよつと舐めてみたらしい。男性独特の臭いと味を知ると、女の肉体は更に官能を得た様子だ。

豊乳揉みされて舌キスを絡める幼なじみも、唇を離してペニスを見つめる。そして蕩ける眼差しを少年に向けると、恥ずかしそうに聞いてきた。

「あ……りようちゃん、その……も、もうガマン……こくん……出来ないんでしょ……? ホントにもう……し、しかたないんだから……」

言いながら、ポニテを震わせる少女の瞳は、切なさで濡れている。室内はシャワーの湿気と女体の熱と、少女たちのフェロモンで、官能的な空気が漂う。

「ああ、早く欲しくておかしくなりそうだよ」

そう告げると、幼なじみの瞳が嬉しそうに揺れた。

「そ、それじゃ……わたしから……」

順番も決めていたらしい。紗夜華と佳奈が身体を離すと、良介は舞が望むとおりの、正常位の体勢になった。

開脚させた美脚を少年の肩に掛けさせて、ギンギンの勃起を濡れた媚孔に押し当てる。

「んん……りようちゃん……あつい……」

「いくよ、舞……」

「うんっ——んひゃあああ……っ！」

ニユプっつと一気に突き込むと、それだけで少女の背筋が大きく反らされた。堅い熱肉で埋められた粘膜は、一生懸命に本体を抱き締めてくる。

濡れた熱腔で勃起肉を包まれると気持ちよくて、腰が勝手に抽送を始めていた。

——つつちゅっぶるちゅぬるぶつちゅぶる、つぶつぶつぶぢゅっ！

「舞の中、熱くて……すぐに……！」

遅く速く、浅く深く、腰打ちで責める。ランダムな男根抽送に、ポニテ少女はしなやかな肢体を悩乱させる。

「ひゃあああんんっ——おくが、ズンズンされちゃふうううっ——はやいのっ、おそいのでうっ——おなか燃えちゃふうううっ——っ！」

高いカリ肉で入り口を擦ると、舞のお尻が切なげに震える。子宮口を強く突くと、涙目になって脱力してゆく。

乱れる吐息と涙に愛顔を染めて、舞はただ良介だけを求めて抱き付いた。

「りょうちゃんっ——っんあっ……もつと、欲しいようっ——っ！」

思わず素直な告白をくれると、熱い膈壁は更に、愛情の熱と蜜を溢れさせる。

肉突きする勃起がヌルヌルと締められて、良介の腰から背筋もビリリつと甘電。肉体は性感に力んで熱を溜めて、腰の奥で射精の力が圧縮されていた。

「もっ、もつといいよふっ——ひゃんひゃんっ、強く、ひてへっ——わたひ、蕩けひゃうのっ——とけひゃうよふうううううっ！」

最奥を叩かれる強い官能で、肌が上気し霧の汗を纏って、涙が溢れて言葉が蕩ける。抱き付く両腕もフルフルと脱力して、突き上げられる衝撃で豊乳もプルプル弾んだ。

勃起で愛撫される膈壁は、更に快感を促すように、懸命に抱き締めて本体を愛撫。引き締まった下腹部は子宮の快感を伝えるように、ピクピクつと痙攣を魅せていた。

「舞さん……すごいです……」

「ああ……んく……気持ちよさそう……」

二人の交わりを見ていた少女たちは、導かれるように舞の横へと、四つん這いで身を寄せてくる。左側の紗夜華が舞にキスをする、右側の佳奈が揺れる豊乳を唇で愛撫。

「んちゅっ——さ、サヤひゃっ……ちゅ、ぶちゅ……かなひゃんっ、ムネらめえっ——んひゅんっ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

**二次元
ドリーム文庫**

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

**二次元
ドリームノベルズ**

サイズ:新書

※盗作・転載は厳禁です。無断転載は法的責任を負っていただきます。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!



二次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



ニミタクアンリアル

フェチをテーマに突き抜ける作品群!!



P comic

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!



メガミクライシス

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



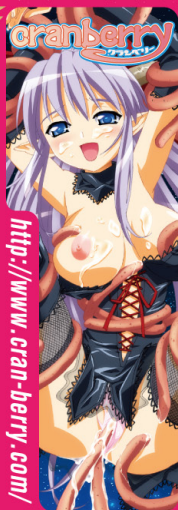
電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **11月発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!